

—又七の七不思議—その⑥ 絵図編—

野元新市

序説

口永良部島の元禄絵図と天保絵図が似通っている。130年前と殆ど変わりがないように思える。だが、よく見ると代表的なものとして絵師が変わった。それだけではない責任者も変わった。まだありそうだと言う事で詳細を調べる事にした。方法は、日本国絵図である慶長国絵図、寛永国絵図、正保国絵図、元禄国絵図、享保国絵図、天保国絵図の6絵を、口永良部を中心に『国絵図解説辞典』を基にして、形状・文字情報・色彩・舟路を中心に、『琉球・薩摩交流史の痕跡』と鹿児島地誌(幕府と薩摩)との整合性にも触れていく事が狙いである。

文禄4年(1595年)に、佐土原領主であった島津^{ゆきひさ}以久(父日新公島津忠良の子忠将の子)は、叔父島津貴久より口永良部島を賜った¹。その後以久の不継により島津家久の兄弟島津義弘の血族の島津家久の8男島津久雄を後継ぎにし、永吉島津家の初代領主になった。

第1章 慶長国絵図の特徴

徳川家康が、江戸幕府が開かれた翌年慶長9年(1604年)に諸大名に、国絵図と郷帳の提出を命じた。指示は簡単なもので、郡の

¹ 『上屋久町誌』P153に、八代左近将監清時が、島津元久より応永十五年(1408年)に与えられたとあり、同P175には、種子島氏に代わって、文禄四年(1595年)に、島津以久に渡された(与えられたP175下段8行)とある。又永吉島津家佐土原領主の関係は、宮崎教育委員会の新名一仁『島津家久・豊久父子と日向国』を参照する。

田畑の高と国の境目を入念に書くことである。国絵図としては12か国余りが知られている。和泉・摂津・小豆島・越前・備前・周防・長門・阿波・筑前・豊後・肥前・日向等西国である。同時に慶長10年に、郷帳「国主城主記」指出高がわかるものの提出も命じた。これは家康の豊臣支配に対する把握である。「清絵図」は残されていないが、ほぼ同仕様・同内容のものがある。それが長門国・周防国の絵図である。慶長国絵図は作成されていない。²

第2章 寛永国絵図の特徴

寛永9年(1632年)に徳川忠秀が死去し、寛永10年に3代将軍徳川家光による「御代始」が始まった。全国を6に区分し3人一組で「巡見使」が派遣された。³「巡見使」は旗本で構成された。目的は、表向き道筋・境目の見分けであったが、国絵図徴収の事が老中の法度の中に書かれている。寛永10年(1633年)9月1日に、大隅半島の肝属郡大泊から屋久島、永良部島、種子島に立ち寄り、大泊にはようやく10月中旬に戻った⁴。翌11年2月に「巡見使」は江戸へ到着した。そして、寛永12～13年頃に幕府へ献上された。これが「寛永十年巡見使上納国絵図」⁵である。しかし寛永16年の江戸城火災により現存しない。だが焼失前に写図が作られていて、「日本六十余州図」⁶と呼ばれる。この図は全国68カ国から提出された。秋田藩佐竹家、尾張徳川家、岡山藩池田家、萩藩毛利

² 国絵図読解辞典 P10

³ 国絵図読解辞典 P11

⁴ 国絵図読解辞典 P11

⁵ 岡山大学附属図書館池田家文庫所蔵、鹿児島県立図書館.日本六十余州図 寛永十年巡見使国絵図

⁶ 秋田県公文書館佐竹家本より尾張と播磨を補う

家、熊本藩細川家、臼杵藩稲葉家等各地の大名家に伝来している。いずれも簡素なもので個別の村高の表記も無い、正保国絵図とは目的も仕様も全く異なるものである。

寛永15年5月に、幕府大目付井上政重^{いのうえまさしげ}は中国筋の大名に命じて国絵図の修正を急がせた。とくに国境道や大阪・中国・九州への海上航路と里程について聞いた。⁷理由は島原の乱の鎮圧に交通情報が不十分であった。井上は、播磨・備前・因幡・伯耆・備中・美作・備後・安芸・周防・長門に絵図の修正を求め、他に但馬・出雲・石見・隠岐からも提出させて、巡見使国絵図の修正図を「寛永十五年国絵図」と言うのである⁸。

そこで、現在では、慶長日本図は作成されず、寛永日本総図は「寛永10年と寛永15年の2回作成されたとなっている。

第3章 正保国絵図の特徴

徳川家光は正保元年(1644年)12月、大目付井上政重と宮城^{みやぎ}和甫^{まさよし}は、江戸留守居役を国主並び第身の大名として幕府評定所に集めた。目的は、国絵図・郷帳^{みちのりちょう}・道帳^{みちのりちょう}・城絵図の作成の命達である。幕府領については幕府代官が担当する。基本は、郡区分を行い、村名・村高の記載、太細朱線での本道と間道の描き分け、36町間隔か(3,927m)で一里山(塚)、渡河方法・川幅・水深の注記、異国船見張りのための遠見番所の図示などを指示した。⁹国絵図は国ごとを基本としたが、国の広いものは7分割、島嶼部からなる琉球は3分割とした。城下は四角で表示、藩主の記載のみである、城下の

⁷ 国絵図読解辞典 P11

⁸ 国絵図読解辞典 P11 〈川村博忠説〉の証明

⁹ 国絵図読解辞典 P11

詳細は城絵図に仕立てられ、絵図元から幕府へ上納された。これが慶安初年（1648年）頃である。因みに、幕府が城絵図を徴収したのは正保度だけである。

しかし、明暦3年（1657年）1月に、江戸大火によって正保国絵図は焼失した。幸い、131^{しき}鋪のうち63^{しき}鋪は焼失を免れた。「官撰地図」である正保国絵図が失われたので、幕府は寛文年間（1661～73年）に、絵図元に国絵図の再提出を求めた。しかしながらこの再提出に関しては様々な問題がある、絵図元では、控図、写図、清書、等の事であるため「正保度」と「寛文度」の絵図の吟味は研究しなければならない。

そして、日本総図は、提出された正保国絵図を基に、大目付井上政重が主導して慶安4年～承応2年（1651～53年）頃に完成させた日本総図の写しが、国文学研究資料館にある。

ただし、この日本総図も正面が、明暦大火で焼失したため、寛文

国絵図の再提出時に合わせて、兵学者で測量技術の心得もあつた大目付の北条^{うじ}氏^{なが}長（正房）が再度担当した。氏長は、諸大名に城下から

「まとめ」

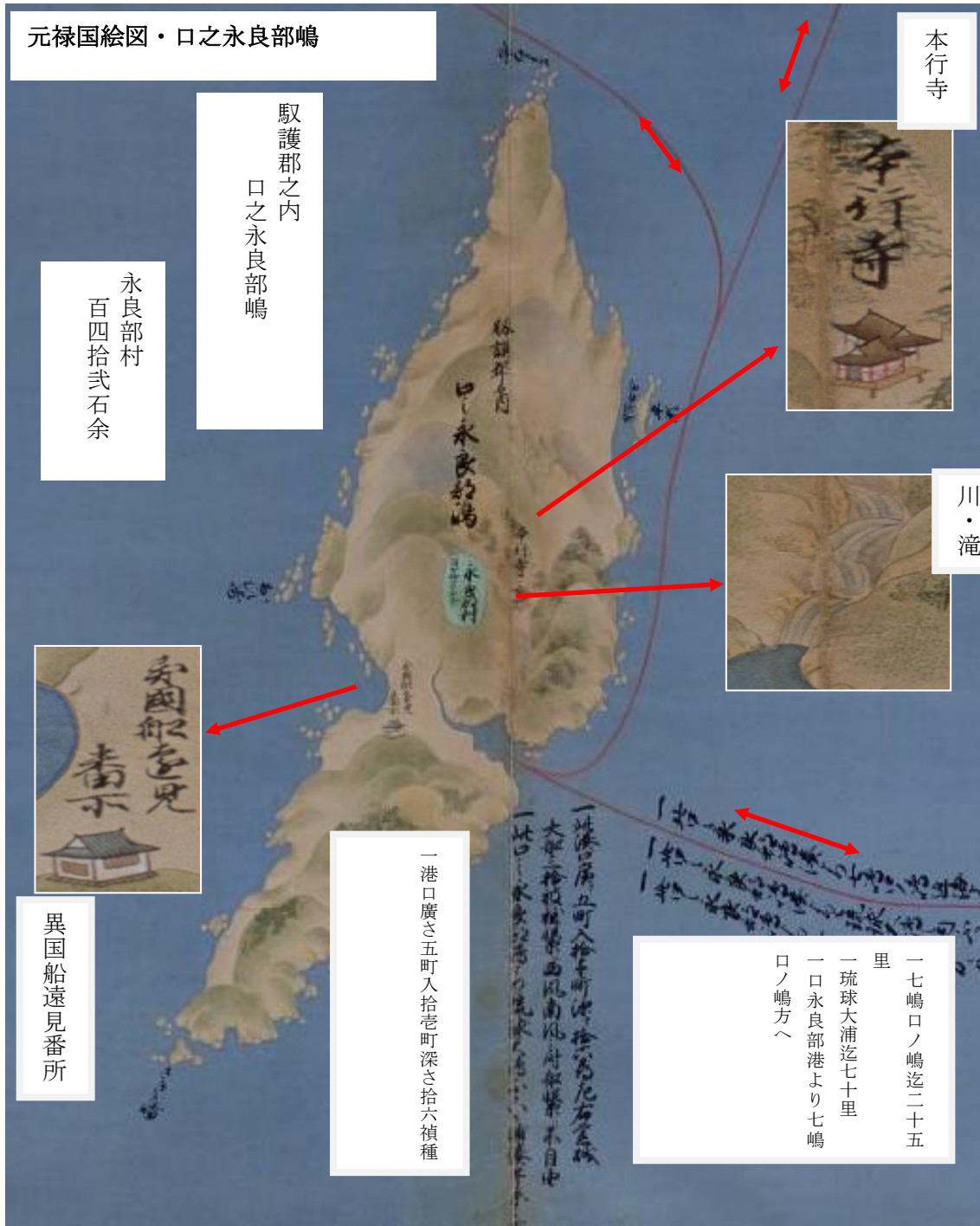
江戸幕府による国絵図・日本総図編集事業は、天下統一を成した徳川家康が中央集権の江戸幕府を確立する為に行ったものである。諸大名の実情把握・国絵図と石高であった。特に国絵図に対しては国境を入念に支持している。「慶長国絵図」は実際作成されていない。寛永になって10年と15年に「寛永国絵図」が2回作成される。1回目の国絵図は寛永16年の江戸大火で焼失し、写図より「日本六十余州図」が作成されるが簡素なものである。そして2回目の寛永15年に大目付井上政重が大名に国絵図の修正を命ずる。この修正図が「寛永15年国絵図」である。正保元年に徳川家光は、本格的に国絵図編纂事業を命じ、慶安初年（1648年）には徴収されたが、明暦3年の大火で「正保国絵図」★1は焼失した。そこで幕府は再び寛文年間（1661～73）年に、絵図元に国絵図の提出を命じた。そこで問題が生じているのは、正保図と寛文図の酷使が見られるのである。日本総図は、正保国絵図をもとに大目付の井上政重が仕上げた。この図も大火に会い、再提出を余儀なくされ大目付の北条氏長が編集した。★2

江戸日本橋、国内並びに隣国の城下までの^{みちのり}道度（道程）を報告させ

「正保日本総図（再製図）¹⁰が編纂された。一里目盛が表記されている点の特徴である。

- ★ 1 国立公文書館に1部所蔵
- ★ 2 大阪府立中之島図書館・国立歴史民俗博物館に所蔵

第4章 元禄国絵図の特徴



¹⁰大阪府立中之島図書館 国立歴史民俗博物館

第5代徳川綱吉将軍が、元禄10年（1697年）2月に寺社奉行井上正岑のほか、町奉行、勘定奉行、大目付から各1名を担当させて国絵図改訂事業を命じた。絵図元の多くは城持ちの大名である。幕府は、絵図元に対して正保国絵図（寛文再提出）を貸し与えて変更箇所を修正させた。国境に対して正確な記載が求められ、領地や植生は簡素化され、清書は幕府御用絵師の狩野良信派が担当して表現の画一化を図った。統一した国絵図は、83鋪完成したが、江戸城の火災により原本8本、模写8本が国立公文書館に所蔵されている。寛文期以降の時世では国境の論争が絶えず、元禄12年（1699年）に、国境の「縁絵図」作成を命ずる。さらに将軍から諸大名・公家・一部の寺社へ判物・朱印状が発給された「寛文印知」により元禄国絵図編纂事業は、公儀としての国を把握するものとして国絵図が位置づけられた。村形に領主記載は必要なかった。元禄14年（1701年）7月には、沿岸戦を有する大名には、「海際縁絵図」の提出を命じ、その後絵図元に、「道程書上」を要請した。そして元禄15年12月に狩野良信は、324,000分の1の縮尺で、3分割した日本総図を完成させた。原本は残っていないが、明治大学図書館蘆田文庫の写図、43枚の切写図が静岡県立中央図書館、豊岡市教育委員会に所蔵されている。現在は豊岡市立歴史博物館に所蔵されている。がしかし口永良部島には何も書かれていないことを学芸員の市原氏に確認する。¹¹

第5章 享保日本総図の特徴

第8代将軍徳川吉宗は、元禄国絵図が四国の西端が南に下がって

¹¹ 豊岡市立歴史博物館 職員市原氏確認 tel0796-21-9012

いる描かれたことなどから、享保2年（1717年）に再製を、勘定奉行大久保忠位^{ただたか}に命じた。吉宗はしばしば「紅葉山文庫」より元禄絵図を取り出して眺めていた。享保日本国総図の作成は、正保日本総図を担当した北条氏長^{うじなが}の子、氏如^{うじすけ}が担当したが、のちに算学者^{たけべかたひろ}の建部賢弘に交代した。建部は元禄国絵図の縮尺を10分の1に縮め、見当山^{みあてやま}への望視によって方位を把握したデータをもとに、縮小図を継合せると言う方法で、享保13年に日本国総図を完成させた。それから90年後、伊能忠敬没後の文政4年（1821年）に高橋景保^{たかはし}^{かげやす}らによって「大日本沿革輿地全図」が献上されていたため、天保度の国絵図編纂事業では日本総図の作成は命じられなかった。¹³享保日本図の最終的な成立は、享保13年2月である。完成図は6分1里縮尺であったが、現存せず3分の1に縮めた写本がある。¹⁴

第6章 天保国絵図の特徴

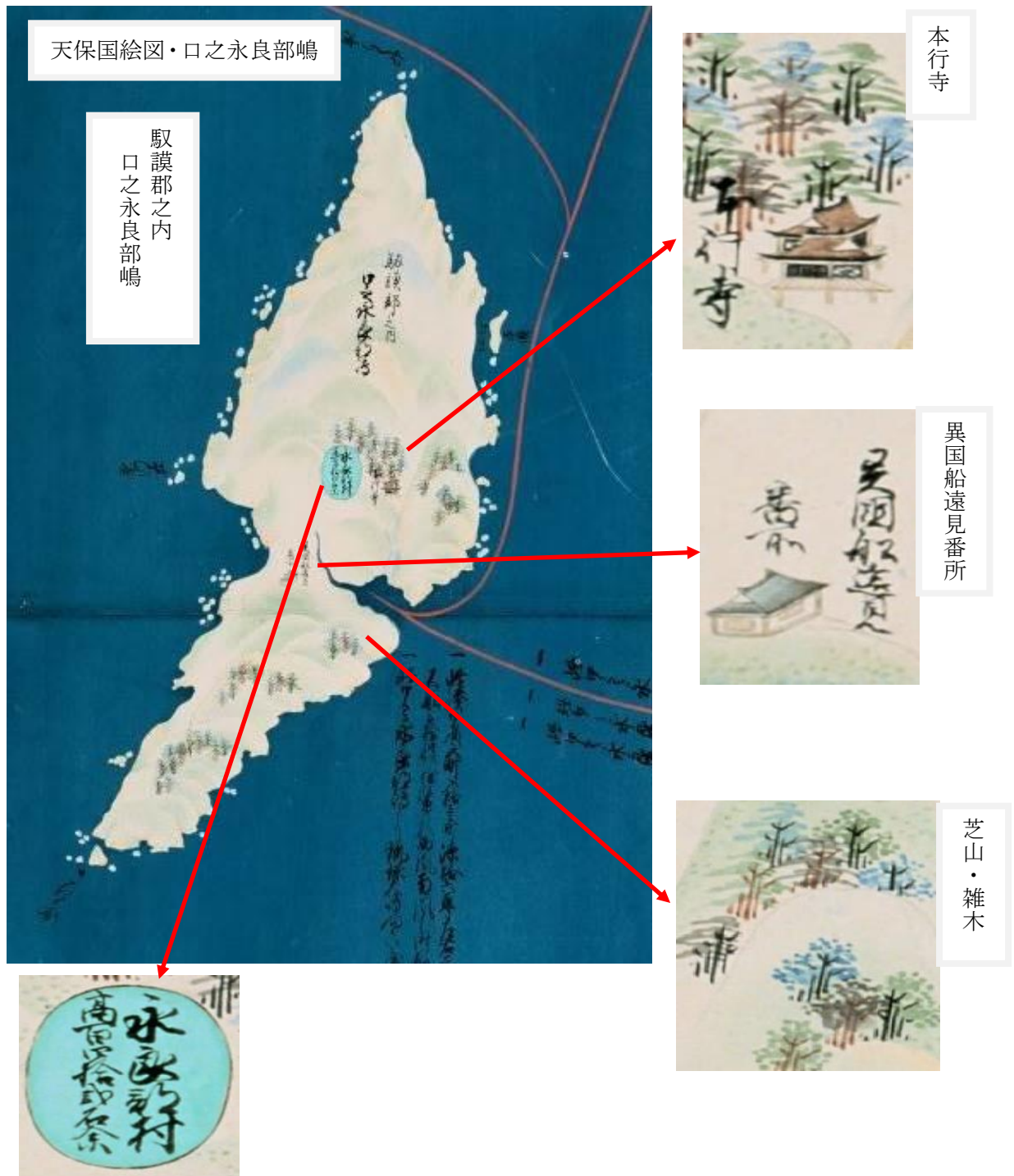
天保2年（1831年）12月に、老中水野忠邦は各藩に石高の調査を命じた。新田を含めた実高である。天保郷帳の提出には約4年間要した。薩摩藩のように実高を記載しない藩があった。郷帳が提出されて、河川流路^{かいち}の変化、変地^{かいち}や新田村の位置、等を改めるために諸藩へ元禄国絵図の切図を渡し、変更箇所^{かけがみ}を懸紙で提出するように求めた。当時の異国船出沒に対して、大筒台場の表現も見られ海岸警備強化が反映された。諸藩から提出された「懸紙修正図」をもとにして、幕府勘定方は狩野派絵師らによって、天保9年（18

¹²高橋景保（1785-1829）シーボルトに伊能忠敬との間宮林蔵が作成した地図を渡した男で、切腹させてもらえず塩漬にされた後、1年後に斬首された。

¹³ 国絵図読解辞典 P13

¹⁴ 国立歴史博物館秋岡コレクション

38年) 5月に天保国絵図2部を完成させた。経費は幕府の負担で、1部は「紅葉山文庫」へもう1部は勘定奉行所保管である。1部欠本もあるが、現在では国立公文書館に全国68カ所及び琉球国と松前の天保国絵図が所蔵されている。



第7章 まとめ

国絵図作成には、定めがあった。その指示通りに作成することが必須であったのでそり1部を紹介する。

「^{こつきょうへりえず}国境縁絵図」は、元禄14年7月に指示されたもので、幕府が初めて沿岸諸国へ命じたものである。海岸筋の陸側と海側をある程度の幅をもって描いた沿岸部分の絵図である。縮尺は国絵図と同じで、国絵図の沿岸部分だけを抜き出した絵図である。

● 「^{うみぎわへりえず}海際縁絵図」は、幕府の指示通りに作成された。作成要領は、①縮尺は国絵図に同じにする。②図示範囲は絵図面で海岸より2～3寸程度とする。③村形には村名のみ記して村高は不要である。^{しゅう}舟路を朱引き、諸島は国絵図と同様に図示する。⑤仕立ては念入りでなくてもよく、美濃紙2枚重ねでよい。⑥国元で製作しなくとも献上図の控が江戸藩邸にあれば、それを基に作成すればよいと示されている。¹⁵

● 「遠望術」は、正保日本図を指導した北条氏如^{うじすけ}である。元禄図では、九州と本州及び四国の配置の検証である。天草代官は頻繁に手代に磁石を持たせて出かけている。そして、報告では中津城から見た上関の方位は寅（北東）であったが、元禄図では、上関が卯（東）の方位に描かれていて、配置の不正確さも確認されている。

● 「^{ごうちょう}石高と郷帳」については、「郷帳」は国絵図とセットで提出されるもので、原則として生産高を基

口永良部島	184
硫黄島	36
竹島	20
黒島	45
口之島	110
中ノ島	82
我蛇島	3
諏訪瀬島	127
悪石島	35
平島	75

表 1 島嶼石高比較

¹⁵ 岡山大学附属図書館池田家文庫蔵 P112

★表 1 薩隅日琉諸郷便覧 元明帝和銅六年四月より

準として石高制の下で作られる。^{こくとしやうごう}国斗升合の単位で、石高は、田畑の生産高を米の体積で換算した値となり、1石=140～150kgであった。大名や旗本の収入となる。

● 「料紙」と「彩色」と「方位表記」は、^{えちぜんきすきまにあいじやうじやうがみ}「越前生漉間似合上々紙」とし、裏打ちには厚い「美濃紙」を一度用いる事を定めた。御用紙の産地である。「間似合紙は、桃山時代から使われていて上級紙とし、江戸時代に入ると土を入れた「泥入間合紙」が普及した。「間合紙」の産地は、越前、摂津である。価格も効果であった。「裏打紙」としては美濃紙が使用された。古代から美濃で生産され^{なおしがみ}「直紙」とも呼ばれた。

● 「彩色」は、代表的なもので、青色・緑色・赤色・黄色・茶色で、藍銅鉍/群青・孔雀石/緑青・辰砂/^{ぎんしゆ}銀朱・雄黄/石黄・^{せきど}赤土/ベンガラで、黒色・白色・^{とういろ}橙色・^{しゆいろ}朱色・白色は、菜種油/墨・貝殻/胡粉・鉛/鉛丹・水銀/硫黄・鉛/鉛白である。他にも藍・ラックカイガラ虫・藤黄・藍と黄色の彩色混合がある。これらの色を使用し幕府は絵図元へ指示をした。例えば国境、川、海、山、「郡」、「村」、寺院等である。「方位表記」には、①四辺内向 ②四辺外向 ③四隅内向 ④四隅外向がある。最古の日本図とされる^{ぎやうきず}行基図（14～16世紀頃）は、華夷秩序を反映した「東夷・^{せいじやう}西戎・南蛮・^{ほくてき}北狄」の文字が表記されていた。江戸幕府撰国絵図の方位表記は、慶長期から天保期まで一貫して「東西南北」の文字表記が採用された。元禄国絵図の方位表記を見ると統一はされていないが、大隅国だけが表記がないのはどうしてだろうか。

● 「描法」は、「阿蘭陀流町見術」が、一般的に普及したことは知られている。井上政重も1647年に、天文学と幾何学を習ってい

る。1650年にもオランダ東インド会社のユリアン・スヘーデルが江戸に滞在し直接伝授しているようである。その時に軍学者の北条氏長が、江戸の実測図を残している。国絵図作成に当たっては、調査結果から直接大紙に作成したのではなく、何らかの縮図を原図として、拡大する技法がとられたと見られる。転記する方法として、

● 「角掛法」が用いられた。この方法が大図から縮図へ、縮図から大図への変更が可能である。日本総図も作成されたが、地図の中心を確定するのに様々な方法をとった。¹⁶

● 「望視方法」については、「見当山」^{みあてやま}を報告させて、そこから「磁石」「丈木」「用紙」を使って「墨引絵図」を引き、望視山までの「見次」^{みつき}を繰り返して作成するものである。誤差は、望視山から富士山の方位は、0度～35度であった。¹⁷

● 「舟路（航路）」^{しゅうろ}については、諸島である口永良部に直接関係がある。汽船が明治になって航行するようになると、明治18年に500石以上の帆船の製造は禁止された。日本の沿岸航路を航行していたのは帆船である。帆船は風が頼りであり「風待港」^{かぜまちみなと}が必要である。「風待港」は、帆船が待機する場所で「良港」と呼ばれている。口永良部港は、太古から琉球・奄美・中国への「密貿易港」であった。寛永15年に幕府から求められた国絵図の中にも舟路の記載がある。それには17か条が列記されている。¹⁸この事により国絵図には海上の舟路や港の詳細がほぼ統一された。¹⁹日本総図には、壱岐・対馬・五島列島・天草諸島・種子島・屋久島への舟路が朱線で

¹⁶ 国絵図読解辞典 P120

¹⁷ 国絵図読解辞典 P124

¹⁸ 国絵図読解辞典 P173

¹⁹ 国絵図読解辞典 P174

示された。しかし、日本総図では島嶼への舟路が記載されていない省略されていることも留意しておくことが必要である。²⁰

● 「信仰（寺社）」については、種子島・屋久島・口永良部島に描かれている寺社について元禄図と天保図を総合的に比較検討する。寺社の描写が異なるのは、国や絵図元の基準が異なっていた。寺社を描くこと自体本来の目的ではなかった。正保図の時には記載基準はなく、元禄図に当たって正保図の記載は前例踏襲するようになっている。そして、天保図は、^{かいち}辺地の修正だけでよかった。寺社は国絵図としては^{てんけい}添景として位置づけられた。ので、初期の国絵図迄遡って慎重に検討しなければならない。²¹寺社の描写の構成は、一般的に図像と寺社名とで描写される。寺社の建物の描写について下図に一覧した。辞典には、柱が朱で塗られているケースはあまりないがあるが、元禄図の屋久島・口永良部島は朱である。しかし、天保図

表 2 元禄図と天保図の寺社の比較（屋久島・口永良部島・種子島）

元禄国絵図と天保国絵図			元禄国絵図					天保国絵図						
			屋根	棟	軒先	窓枠	柱	鳥居	屋根	棟	軒先	窓枠	柱	鳥居
口之永良部嶋	永良部村	本行寺	黒	黒	黒	朱	朱		茶	黒	黒	黒	白	
屋久嶋	宮之浦村	益救神社	黒	黒	黒	朱	朱	朱	茶	黒	黒	茶	茶	朱
	栗生村	本寿寺	黒	黒	黒	朱	朱		茶	黒	黒	茶	茶	
種子島	西之表市	本源寺	黒	黒	黒	黒	黒		茶	黒	黒	黒	黒	

になると無くなるのである。これは偶然だろうか。又天保図は、非常に簡素化されているが、種子島だけは変わらないのは何故だろうか。

寺社は、一般的には、塔などの特別なものを除いて、大部分は高床式の入母屋造り、平入で描かれている。正面は向拝が付けられている例も少なくない。色は屋根の茶色、棟・軒先の黒、窓枠も黒が多

²⁰ 国絵図読解辞典 P176

²¹ 国絵図読解辞典 P181

い、寺院と神社の明確な区別はない。これらの違いは、国や絵師による違いもある。元禄図は狩野良信によって統一され、天保図は、作事方が雇い入れた絵師たちによって作図されたのでやや統一性は弱まっている。²²

「植生表現」は、元禄国絵図は重厚な感がして描かれている植生がはっきりしないので、天保国絵図で検討してみる。元禄から天保にかけて大きく成長している。「芝山」ではなく、「雑木」として考える。「芝山」とは、一度伐採して生えてきている山のことである。

「雑木」とは、「用材になる程度の大きな木のある山」とされる。口永良部島はどちらだろうか。屋久島と比較しても同様に見えるので「雑木」として推測する。そうすると「本行寺」は「雑木」で建立されたのか。

第8章 小括

最後に「国絵図読解辞典」の紹介を兼ねて書きたい。例えば「比叡山」と「高野山」の描き方であるがまるで異なっているのは何故か。伊能忠敬は、優秀な測量技師であった事は疑う余地がないがその前段として技術的指導を乞うているのも事実である。日本国絵図大図は、どれ位の費用がかかったか。天保7年（1836年）の米3石相当である。1石当たり75,000円とすると坪単価20～25万円である。そうすると薩摩国絵図は、8,5坪であるので、213万円位となる。²³又国絵図の重さは、図書館でも把握されておらず測量は困難であるとの回答であった²⁴

²² 国絵図読解辞典 P182

²³ 国絵図読解辞典 コラム1 国絵図と作成費用 P76

²⁴ 宮城県立図書館 西村氏 仙台領国絵図 元禄14年（1701）516×841cm

ところでは薩摩藩での地誌の編纂はどうだったかと言えば、原口泉氏²⁵によると、「寛文印知」と関連すると書かれていて寛文7年（1667年）に、藩に願い出て国中の寺社・古城址・名勝を調査し「国郡一統志」十五巻を著した。がしかし薩摩ではこの時期に地誌編さんが行われた形跡はない。²⁶薩摩藩で大切なのは「正統系図」であり、身分秩序の確定と家格の編成であった。では薩摩藩での地誌の誕生はいつか、原口泉氏によると、薩摩最古の地誌は「地誌要略」である。何故ならば宝暦6年（1756年）、幕府の「監国史」の巡見により記録所で、国目付の求めに応じて「地誌要略」を作成し上呈した。²⁷「国絵図読解辞典」では、寛永10年（1633年）に「巡見使」が国を回ったとあるが、薩摩は123年後になるのは、天保国絵図作成依頼の事ではないだろうか、天保国絵図の作成は各藩の絵図元への指示は、修正部分だけ（変地）^{かいち}を提出せよというものであった。薩摩藩の独自の地誌は、第15代藩主島津重豪の命により、記録奉行本田親孚が、文化3年（1806年）成立の「薩藩名勝志」全十巻である。そして国学者白尾国柱によって「薩藩名勝考」（十巻十冊）

土佐国	98,200.00	202,626.50	202,626.00	248,328.12	268,484.97	330,026.52
筑前国	335,695.00	522,512.40	522,515.00	522,512.60	606,981.42	651,782.28
筑後国	265,998.00	302,085.50	302,085.50	331,497.77	331,497.77	375,588.90
豊前国	140,000.00	330,744.64	330,740.00	244,787.67	273,801.85	368,913.64
豊後国	418,313.00	378,592.40	378,592.00	357,300.52	369,546.79	417,514.23
肥前国	309,935.00	561,437.40	561,437.00	566,882.16	572,284.12	706,470.72
肥後国	341,220.00	572,989.00	572,989.00	579,711.79	563,857.18	611,920.29
日向国	120,088.44	288,589.50	288,589.00	290,180.97	309,954.53	340,128.86
大隅国	175,057.23	170,828.10	170,828.00	170,833.45	170,833.45	170,833.45
薩摩国	283,482.74	315,251.70	315,251.00	315,005.60	315,005.60	315,005.60
壹岐国	0	15,982.30	15,982.00	17,568.03	18,072.81	32,742.92
対馬国	0	0	8,163.00	6,269.72	0	0
琉球国	n.a.	n.a.	n.a.	123,711.81	123,711.81	123,711.81
大島(奄美群島)				32,828.70	32,828.70	32,828.70
本琉球				90,883.11	90,883.11	90,883.11
	慶長3年石高	慶長郷帳石高	寛永国絵図石高	正保郷帳石高	元禄郷帳石高	天保郷帳石高
	(1598年)	604~1610年	(1633年)	644~1651年	697~1702年	831~1834年

²⁵ 都城市史 史料篇 近世1 原口泉 平成13年刊

²⁶ 都城市史 史料篇 近世1 P9

²⁷ 都城市史 史料篇 近世1 P11

が完成する。又玉里文庫には、「南島之部」（巻之十）が存在する。その後集大成として「三国名勝図」が、天保 14 年（1843 年）12 月に、橋口兼吉総裁と記録奉行五代秀堯によって完成した。²⁸薩摩藩に関しては、「元禄国絵図」と「天保国絵図」の石高が殆ど薩摩国・大隅国だけ変化がないのは何故だろうか。²⁹

文献目録

1. 小野寺淳・平井松午. 国絵図読解辞典. 出版地不明：創元社, 2012年2月20日.
2. 原口泉. 都城市史 史料篇近世1. 都城市史. 都城市：発行元不明, 平成13年.
3. 川村博忠. 正保日本国と北条氏長の作図技術に関する若干の考察. 出版地不明：「地図」Vol.46 No.4, 2008年.
4. -. 江戸幕府撰日本図の編成について. 出版地不明：人文地理 第33号巻 第6号, 1981年.
5. -. 元禄年間の国絵図改訂と新国絵図の性格について. 出版地不明：人文地理 29-6, 1977年.
6. -. 池田家文庫所蔵の寛永日本総図について. 出版地不明：「地図」Vol.36 No.1, 1998年.
7. -. 江戸初期日本総図再考. 出版地不明：人文地理 第50巻 第5号, 1998年.
8. -. 元禄国絵図事業における道程書上とその徴収目的. 出版地不明：歴史地理学 50-4 (241) 1~15, 2008年9月.
9. -. 元禄国絵図における国境筋の表現要領について. 出版地不明：歴史地理学 42巻第3号, 2000年6月.
10. -. 江戸初期日本総図をめぐって一海野氏の見解に依って一. 出版地不明：地図 38-4, 2000年8月31日.
11. WikiZer より <https://www.wikizero.com/ja/%E7%9F%B3%E9%AB%98#>
12. 川村博. 国絵図. 吉川弘文館. 2010年. 1月

あとがき

このレポートを書くにあたって、口永良部島ポータルサイトの山口英昌氏や本興寺本正院様・種子島日典寺・屋久島久本寺住職並びに、(山口・東亜) 大学名誉教授の川村博忠氏には大変面倒をみて頂き助言を受け賜りました事を心より感謝します。大変勉強になりました事を言いたくて書きました。

それから、このレポートは、大半と言うか殆どが「国絵図読解辞典」の要約のようなものであり、そのことを理解して頂きながら口永良部島の「元禄国絵図」に描かれている様子をどの様にとらえるかを知るヒントになればと言う思いです。絵図には当時の歴史があり発見があり思惑があるので非常に面白かった。まだまだ足りない部分も多々あり不完全ではあるがひとまず口永良部に関しては終わることにする。

²⁸ 都城市史 史料篇 近世1 P14、P18

²⁸ WikiZer より

²⁹ 川村博忠. 国絵図. 平成2年12月1日. 日本歴史学会. 吉川弘文館. P171 表5参考